

## 韓国における歴史研究と歴史葛藤をめぐって

「反日種族主義」事態を手がかりに

三ツ井 崇（東京大学教養学部・大学院総合文化研究科 准教授）

---

### はじめに

#### 専門について

私は、朝鮮の近代を中心に、現代も少し視野に入れながら、教育史や文化史の研究をしてきましたが、最近は史学史という研究もしています。史学史の研究というのは、単なる研究史ではなく、「歴史学という学問そのものの歴史が、社会の中でどのような位置づけにあったか」という観点からの研究です。特に、明治期の日本の近代歴史学成立以降、朝鮮に対する知がどのように形成されたか、という研究をしています。

それと同時に、近年俗に「日韓間における『歴史認識』問題」と言われていることに関して、朝鮮史を専門としない方々にどう説明するかという役割を担うこともあります。直近のところでは、『反日種族主義』という本が出て、それに対する様々な反応があったことをどう捉えるべきか、ということでお話をさせていただきました。

#### 今回の講座の土台——『韓国における植民地期歴史像の葛藤』

『歴史評論』という雑誌の2021年5月号に、『韓国における植民地期歴史像の葛藤』というタイトルで書かせていただいた内容を土台にして、その後に私が触れた本などの情報も少し入れながら、今回はお話をしたいと思います。

そのため、今回は『反日種族主義』という本に対する批判とは、少し異なるお話になるかと思っています。

## 『反日種族主義』とその反応

### 『反日種族主義』事態とは

「日韓間の『歴史認識』問題」というものが積年の課題としてありますが、史学史の観点からしますと、「アカデミズム、特に歴史学界と、政治との距離の問題はどうか」ということを考えていく必要があると思われます。

『反日種族主義』という本が刊行されて、またそれに対する反応がいろいろありました。これらをひっくるめて「『反日種族主義』事態」と言っておりますが、もともとこの本のタイトルに「反日」という言葉が入っており、その内容に対しては「親日的」とあるという批判が出てきてしまっています。こうした「親日」か「反日」かというレッテル貼りのような状況は、メディアを通して拡散されているようなところがありますが、一方でその中身を見ると、いわゆる「徴用工」問題あるいは日本軍「慰安婦」の問題、その他の日本の植民地統治に関する歴史の解釈が主題化しています。これは、「何が正しいのか、あるいは間違っているのか」ということもさることながら、こういった事態が起きているという現象そのものが「葛藤」と言えるため、今回のタイトルに「歴史葛藤」という言葉を使わせていただきました。

いわゆる「歴史認識」問題や歴史修正主義を語る議論の中で、一般的にメディアなどでは「日韓対立」のような形で表象されていますが、韓国は韓国の中でその「葛藤」を抱えていて、日本も日本の中で「葛藤」を抱えている。こうした葛藤が日韓間で交錯しているという捉え方のほうがより正確であろうと思われます。

このような状態を踏まえたときに、「『反日種族主義』事態」とはどういうものとして考えることが可能でしょうか。メディアでは先ほど言ったような「親日」か「反日」かというレベルで議論されているのに対して、アカデミズムの世界ではそこで展開されている論が学説上どうなのか、正しいのか間違っているのかということに関する検証と批判というものも当然行われています。このアカデミズムとメディアとの間の異なる次元、あるいは差異が、日本に伝わってくるときにいろいろと混線しているというのが実際のところだと思っています。

### 「『反日種族主義』事態」を史学史の観点から捉える意義

この混線している問題をどういう観点から見たらいいのかを考えたときに、やはり「史学史の問題として考えるべき問題があるのではないか」と私は思います。特に 1990 年代以降の韓

国の歴史学における変化を押さえながら、この事態を読み解いていく必要があるのではないかと考えています。『反日種族主義』に対して、批判本も含めて様々な本や論文が出ていますが、このあたりに触れているものが少ないと言えるでしょう。

これはもちろん、思想、社会の問題、政治の問題であると同時に、やはり「アカデミズムにおける植民地期の『歴史認識』というものがどう推移していて、その中でどのようにこの問題が起きるのか」「この問題が起きるような土台あるいは背景があるのか」ということを分析する視角も必要だと思います。

そこで問題になっていく「植民地近代化論」についてはまた後ほどお話しすることにして、歴史学界の動向と「『反日種族主義』事態」とをどう捉えるかについて考えてみたいと思います。ただ、私自身もいろいろと調べなければならないところが結構あり、不足するところがあるかもしれませんが、お付き合いいただければ幸いです。

## 『反日種族主義』に対する反応①

### ――「親日」か「反日」かという枠組みから脱していない批判

この『反日種族主義』という本は、2019年に韓国で出て、日本では文藝春秋から日本語版が刊行されました。

いろいろな流れがあって、その批判と反批判が繰り返されていく中で、久保田るり子さんという産経新聞の編集委員の方は『反日種族主義と日本人』という文藝春秋の新書を書かれています。その序文のところを見ますと、「韓国では絶対的な価値観であり、歴史観だと言える『反日』、最大のタブーである反日批判に真っ向から挑戦した『反日種族主義』というような構図」が前面に貫かれているわけですね。これは前提となる図式そのものが、先ほど言いました「反日」か「親日」かというような枠組みを相対化していないという点では、一方的な図式であることは言うまでもないと思います。

<sup>イ・ヨンフン</sup>李栄薫さんという経済史学者で、前はソウル大学の教授をされていた人が中心となって、この『反日種族主義』を書かれたわけですが、この執筆者が依って立つところの韓国の歴史学界の動向に関する記述が、久保田さんの本にはほとんどありません。問題は、「反日」だというふうに批判をしているところの学界の動向に関しては全く分析がなく、この『反日種族主義』の執筆者たちの言葉ですべて説明しようとしていますから、それは一方的にならざるを得ない

わけです。そういったところがそもそも解説としても私は不適當であると思っています。バランスという意味でもそうです。韓国の歴史学界の動向というものがなくて、政治の世界の話がどうしても中心になってしまうわけです。

## 『反日種族主義』に対する反応②

### ――歴史認識そのものの分析や検証に成果が見られる批判

けれども一方、この久保田さんの議論とは全く逆で、この『反日種族主義』の批判をしている人たちもいます。二点代表的なものを挙げておきました。もっとありますけれども、私がじっくり目を通してあるものがまだ少ないということがありまして、今日私が挙げるのは、①保坂祐二さんのご指摘：史実としての正誤が焦点、②<sup>カンソンヒョン</sup>康誠賢さんのご指摘：日韓の歴史否定論の共鳴現象に対する批判、の二つだけです。

つい最近、保坂祐二さんが出された『（反日種族主義）の嘘を暴く』という本では、これは史実としての正誤というところを焦点にしまして、まさに『反日種族主義』という本が嘘だということを述べているものです。これは内容に関する分析が細かいところがありますので、一つの成果だと私は思います。

もう一つ、2020年の末に出た、<sup>カンソンヒョン</sup>康誠賢さんの『歴史否定とポスト真実の時代』という大月書店の本で、<sup>チョンヨンファン</sup>鄭榮桓さんが監修、古橋綾さんが日本語訳されたものです。これは『反日種族主義』への史料論的な批判もありますが、「日韓の歴史否定論がいかに共鳴しているか」ということを批判的に検証している側面があり、非常に面白く、学ぶところが多い本でした。ただ、私は先ほどの『歴史評論』の論文を書いたときには、この本の入手が間に合わなくて、その研究成果を反映することができておりません。

あとでも少し言及しますが、特に歴史教科書の問題をめぐる、いわゆる韓国の右派と日本の右派の共鳴というか、並行的な動きみたいなものを批判的に検証しているという意味で、非常に面白くて、史学史の問題としても重要なことを指摘されています。

ただ、韓国の歴史学界の動向について、どう推移してきたのかという記述がやや少ないことが、やはり少し気になりました。

### 『反日種族主義』に対する反応③——史学史の観点から問題提起をしている批判

そういったところで、韓国で出た本で、イ・チョルウさんほか、先ほどの<sup>カンソンヒョン</sup>康誠賢さんも執筆者の一人ですが、歴史家・法学者など総勢18名が書かれた『誰のための歴史なのか——「ニューライト歴史学の反日種族主義論」批判』という本があります。これはもちろん、『反日種族主義』の中身に関する批判もありますし、主に経済史学者の人たちがこの『反日種族主義』を書かれています、その統計の使い方の問題、あるいはその歴史観への直接的な批判もありますし、様々な観点から書かれています。たとえば、史学史とか、論法やレトリックの問題、あるいは史料論など多岐にわたる観点から、『反日種族主義』という本とその執筆者たちを非常に多面的に批判しているという点があって、非常に面白いものでした。この本は、アカデミズムとしての韓国歴史学界の動向であるとか、歴史教育の問題、あるいは一般社会との距離なども視野に入れて読み解く必要性というものを示唆しているという意味で、非常に意義があると思います。できればこの本も翻訳が出た方がいいのではないかと個人的には思います。

そこで共通して出てくる批判というのが、「『反日種族主義』の執筆者たちが、韓国の歴史学界における歴史研究の成果や動向を意図的に無視しているのではないか」という批判です。このような指摘が多いということは非常に重要なところですよ。二つほど代表的なものを挙げてみますと、まずキム・ホンジュさんという方は、「『反日種族主義』の執筆者たちは韓国の民族主義的な歴史叙述について批判するけれども、2000年代前後から韓国の歴史学界においてもそのような批判は出されているのであって、そのような批判意識に基づいた研究成果もあるのに、それを意図的に無視しているのではないか」ということです。また「『反日種族主義』の批判は主に歴史教科書の叙述に向けられているけれども、教科書は歴史研究の成果をすぐには反映しないという保守的な性格を持つものなので、それよりも歴史学界の研究動向に注目すべきではないのか」という批判があって、確かに『反日種族主義』の本を読みますと、その批判対象はやはり歴史教科書であるということがわかんと思います。

そこで何か意図的に捨象しているものがあるのではないかという指摘を考えたときに、「民族主義的歴史観」というものが先ほどの久保田り子さんの本では「反日」と一括りにされ、韓国のいわゆるスタンダードな「歴史認識」みたいなものとして捉えられていますけれども、そのような「民族主義的歴史観」と「それに対する批判」という構図で捉えていいかという、そういうことではないようです。韓国は韓国の中でいろいろ動きがあったはずなのに、それを『反日種族主義』の人たちが無視しているのではないかという問題もさることながら、

『反日種族主義』を解説したり批判する人たちの中でもこの問題がどうも十分に出てきていないのではないか、と私は感じているところがあります。もちろんそれを批判したりする人もいるわけですが。

## 韓国における近代史研究の転換と「植民地近代化論」・民族主義

### 『反日種族主義』の執筆者たちの背景にある「植民地近代化論」

特に、この『反日種族主義』の人たちを批判する文脈として、よく使われるのが今ご紹介した本にも出てきますけれども、「ニューライト歴史学」というものであるわけです。ニューライトというのは、あとでお話しますように「新保守」ということになりますが、その存立の背景というのを見たときに、韓国の歴史学界でかつて大きな問題になりました「植民地近代化論」というものと「民族主義」の関係をどう捉えるのかということに、問題が再設定されるわけです。事実、この<sup>イヨンフン</sup>李榮薫さん他、『反日種族主義』の執筆者のほとんどがとっていいと思えますが、いわゆる「植民地近代化論者」と呼ばれる人たちです。

### 「植民地近代化論」とは

「植民地近代化論」というのは、ご存知の方も多いと思いますが、1960年代から70年代の韓国の高度経済成長、そして1980年代の民主化を背景として、1990年代に登場したある意味では学説であるわけです。けれども、これを学説としてのみ捉えることできないというのは、あとでお話しますが、それがだんだん政治化していくという側面があるためです。どういう議論か、ざっくり言ってしまうと、「韓国における解放後の経済成長の要件を植民地期における開発のための近代的改革に求める議論」で、その代表的論者がやはりソウル大学の教授であった<sup>アンビョンジク</sup>安秉直さんという人だったわけです。

後ほど申し上げますけれども、<sup>アンビョンジク</sup>安秉直さんというのは<sup>イヨンフン</sup>李榮薫さんの師にあたる人ですので、師弟の間でこの議論が引き継がれていくという構図があります。ただ、やはりこれは1990年代に登場したときに、韓国の歴史学界では大きな問題になりました。

## 学術的な論争としての植民地近代化論争

植民地近代化論争というのがありまして、よく代表的なものとして挙げられるのは『創作と批評』という雑誌で展開された論争です。もう一つは、社会学者であり、しかも日本の統治期におけるその歴史を分析しておられました<sup>シンヨンハ</sup>慎鏞廈さんとの間の論争が有名です。

朝鮮における発展の契機というのを、<sup>アンビョンジク</sup>安秉直さんは「朝鮮における発展の契機を純粋に国内的なものに求める『内在的発展論』を否定し、朝鮮における資本主義の起源を外来の資本主義導入に求め、植民地下、とりわけ1930年代における工業化の進展、朝鮮人資本の成長、マシンの形成などを重視し、それが解放後の経済成長の土台となった」というふうに考えていました。それに対して、<sup>シンヨンハ</sup>慎鏞廈さんは「日本の植民地政策に近代化の契機は一切認めず、『内在的発展論』を踏まえながら、朝鮮時代後期以来の資本主義の萌芽が植民地化によって挫折を余儀なくされた」という議論を展開されるわけです。

こういう中で、植民地近代化論は日本主導の資本主義の導入を肯定的に捉えるという点で一般的に「施恵論」、つまり植民地支配が恩恵を与えた議論であるとイメージされることになりました。まだこの段階では学術的な論争として捉えられていました。しかし、この植民地近代化論というのが、そう単純ではないにしても、次第に政治化していくことになるわけです。

## 「ナショナル・ヒストリー」を構築する言説としての「植民地近代化論」

この植民地近代化論というのはどういう文脈で出てくるのかと言いますと、やはり大韓民国の「ナショナル・ヒストリー」構築のための言説として機能をしていくことになります。

<sup>アンビョンジク</sup>安秉直さんの教え子である<sup>イヨンファン</sup>李榮薫さんが、2009年に『大韓民国の物語』という本を出します。これも日本で翻訳が出ています。これを見ますと、<sup>イヨンファン</sup>李榮薫さんは「『私的自由の原則』に基づく民法（ここでは『朝鮮民事令』〔1912年公布〕のこと）を導入した朝鮮では、その原則に基づいて身分制の解体、近代的経済成長、私有財産制度の確立が植民地期に成し遂げられ、解放後韓国へと引き継がれた」と言っています。そして「日本は『投資をして朝鮮半島の資源と工業施設とを日本の所有にしていくのです』」とし、それを「同化政策に伴う実質的な収奪の恐ろしい結果」と理解しています。「植民地近代化論といえば、人びとは日本の朝鮮

支配を美化するものと考えていますが、とんでもない思い違いです。真の意味での収奪と差別がいかなるメカニズムを通じて展開していたのかを、あるがままに見ようというのが植民地近代化論です。文字どおり『植民地的に進行する近代化』なのです」と植民地支配肯定論であるとする批判に対して、反論をしています。

ただ、この植民地近代化論というのはまさに植民地期の経済的な変化を題材としています。が、力点は解放後史の認識にあります。それは解放後の北朝鮮（共和国）では日本の工業施設を接収する一方で、南朝鮮（韓国）では近代的な法・制度と市場経済体制が、高い教育水準の人的資本を継承した、ということを受け、北朝鮮は社会主義改革に伴い「豊富な物的遺産を受け取りましたが、日本を通じて入ってきた近代的な法と制度を廃棄してしま」い、「近代文明を否定してしま」うことで、「文明の袋小路に入り込んでしまいました」という評価をしています。この植民地近代化論の帰着点は、「文明」史観イコール近代主義を評価軸とした大韓民国史の構築にあるということが、ここで受け取れるわけです。

#### 「ナショナル・ヒストリー」の相対化から民族主義批判へ

しかし、今日の歴史学界において、日本もそうですし韓国もそうですが、ナショナル・ヒストリーの構築ということに関しては、相対化をしていくということが普通になっています。

そういう中で、この「大韓民国史」と呼ばれるある種のナショナル・ヒストリーを構築していく流れはどういうものとして位置付けることができるのか、ということが問題になっていきます。

実はこの『大韓民国の物語』の少し前に、やはり歴史学界を揺るがすようなことがありました。ちょうど私はこのとき大学院生でしたが、その新たな動きに対して韓国の中でもかなりいろいろ「揺れ」と言いますか、「動き」があったことをよく覚えています。

それは、<sup>パク チヘン</sup>朴枝香さん、<sup>イヨンファン</sup>李栄薫さん、<sup>キムチョル</sup>金哲さん、<sup>キムイリョン</sup>金一栄さんが編者となった『解放前後史の再認識』（全2巻：以下、『再認識』と略す）という本が韓国で出版されたことです。編者の<sup>パク チヘン</sup>朴枝香さんは西洋史、<sup>キムチョル</sup>金哲さんは韓国の国文学の研究者です。この『再認識』の『再』が意図するのは、1979年から89年に出た6巻本の『解放前後史の認識』という本があり、これに対するある種の批判を表面に出しながら、『再認識』の意義を主張していくということです。



この『解放前後史の認識』というのは、植民地期末期から解放までを時代として設定して、解放後の朝鮮半島の南北分断の要因を探り、それを超えるべく「民族史」を樹立するということを目的とした本でした。

一方、『再認識』の方は、<sup>パクチヒャン</sup>朴枝香さんが書かれた序文を見ると、『解放の前後史の認識』が「民族至上主義と民衆革命必然論がわが〔韓国の〕歴史学界に及ぼした弊害」というものを批判しています。ここの引用文は少し長いですが、以下のとおりです。

「民族主義は本来排他的で暴力的な理念である。〔……〕われわれの歴史においてとくに民族至上主義が惹起する問題点は、第一に、それでは苦難のわれわれの現代史を満足に認識し、過去から教訓を得ることができないという事実である。わが民族は非常に優秀だが、他の国のために国が減び、植民支配と民族分断の悲劇を経験したと主張することは、歴史から何も学ばないという主張と異ならない。われわれは他人のせいにする前に、われわれの誤りが何であったのかを自省せねばならず、そうするとき、われわれが実に多く間違っていたことに気づくのである。」

「民族主義は本来排他的で暴力的な理念だ」という論点で批判しており、こういった視点が実際に出てきて、いろいろ物議を醸した側面があります。ただ、この論集に掲載されている論文というのは結構多様な論点があり、一口でまとめるのが大変です。けれども、あえてざっくりとまとめますと、「支配—抵抗」の二分法的な理解や、あるいは「親日派」の断罪など、かつての民族主義的歴史叙述に対して批判をするということを行っています。

これには背景があり、韓国だけの話ではなくて、日本もそうですが、1990年代以降に国民国家というものを批判的に捉えて、それを下支えする「国民の物語」いわゆるナショナル・ヒストリーを超え、また解体しようとする動きがあり、それが韓国でも定着しつつあったわけです。その『再認識』に現れる方の民族主義批判というのは、まさにそのように歴史学界の流れを反映したものであったということは言うまでもありません。

## 『再認識』の回想

ただし、先ほども言いましたように結構多様な論点の論稿が含まれていることもあり、実際には同床異夢の産物であったとことを、のちに回想しています。

先ほどの『誰のための歴史なのか』という本の編者でもあるイ・ Cholウさんという人が回想しています。その『再認識』の中に論稿を寄せた方でもあるわけですが、この方の回想文を読んでもと、以下のとおりとなっています。

「しかし、<sup>ノムヒョソ</sup>慮武鉉政府の末期に登場した『解放前後史の再認識』運動は、複雑な政治的含意を有していた。『再認識』は1980年代以降、韓国近現代史の主流的な観点を代表した『解放前後史の認識』をおもな敵とし、そのような歴史認識に基づいているという理由で、進歩政治を明示的に打撃対象とした。『解放前後史の再認識』の総説に該当する<sup>イヨソ</sup>李栄薫さんの巻頭論文と南北朝鮮の関係を主題とする論文がその点を明確に表していた。しかし、参加したすべての研究者がそのような目的を共有したわけではない。多くは歴史叙述における価値指向性を排除しようという趣旨に共感し、史実でもって語らせるという『クソ真面目な』実証主義を標榜したりもした。」

要するに、価値指向性を排除しようとする趣旨というところに共鳴した人がそこに関わっていたけれども、必ずしも<sup>イヨソ</sup>李栄薫さんたちの議論に全面的に共鳴していたわけではないという回想をしています。

### 「ナショナル・ヒストリー」解体の先にあるのは結局「大韓民国の国史」の構築

実は、先ほどの<sup>イヨソ</sup>李栄薫さんの『大韓民国の物語』は、『再認識』の解説という位置づけを自ら与えているわけです。『大韓民国の物語』には、ナショナル・ヒストリーを解体する、民族主義を批判するという文脈があるわけですが、一方で、大韓民国の国史の構築ということが意図されているので、民族主義的歴史学という意味でのナショナル・ヒストリーを解体した先に、結局は「大韓民国の正当性をいかに担保するかという意味合いでの大韓民国史、国民史の構築」ということが意図されているのではないか、という疑問が呈されます。要するに、この本来の歴史学界における国民国家批判の問題というのが、<sup>イヨソ</sup>李栄薫さんの中でどの程度活かされているのか、というのはかなり慎重に見なければならぬだろうと思います。

つまり結局は、その近代至上主義的な志向が、南北分断のイデオロギーを補強する形で、ナショナルな枠組みを強固にしてしまっている側面があります。したがって、その意味では、実は国民国家を批判的に捉えるという問題意識には必ずしも成功していないというところがあるわけですが、こういった流れが今日的な問題としてまだあることを前提として、考えておく必要があります。

このあたりまでが、いろいろな反論や批判もありながらも、アカデミズムの世界で展開されてきたという側面があります。その一方で、<sup>アンピョンジク</sup>安秉直さんや<sup>イヨンファン</sup>李榮薫さんたちが主張してきたような「植民地近代化論」というものが次第に政治の世界にスライドし、拡大していくという現象が起きます。

---

## 植民地近代化論の政治化——ニューライト運動

### ニューライト運動とは

ニューライト運動の捉え方にもよりますが、「植民地近代化論」がニューライトという動きと並行するという言い方がいいのか、あるいは、ニューライトの運動の中に「植民地近代化論」がその核として取り込まれていくという言い方がいいのでしょうか。つまり、「そもそもニューライト運動とはどういうものなのか」ということですね。

これは、たとえば先ほどご紹介した<sup>カンソンヒョン</sup>康誠賢さんの『歴史指定とそのポスト真実の時代』では、歴史教科書をめぐる運動を中心に、ニューライトの問題を扱っておられますが、実際にこの運動を総体として捉えるときには少し複雑な側面があるようです。

立命館大学で<sup>パクチョンヒ</sup>朴貞憲さんという方がニューライト運動の研究で書かれた博士論文を参考にしながら、「ニューライト運動とはどういうものだったのか」を考えていきます。

1980年代以降の新自由主義的なグローバル化や民主化、あるいは90年代以降の進歩派政権の成立という流れの中で、保守派右派層が危機意識を持つようになって、<sup>ノムドヒョン</sup>盧武鉉政権期にニューライト運動が生まれてきました。いわゆる386世代のいわゆる「転向者」という書き方をしておりましたが、かつて民主化運動に関わったような人たちがむしろ主体となっていくという

側面があり、1990年代から組織化し、2000年代に全盛期を迎えるという運動として捉えられています。イデオロギー的な特徴としては、新自由主義の追求と反北朝鮮になっていきます。

この朴<sup>パク</sup>さんが説明する理論を見ると、「ニューライト運動組織の各系列は、明確に区分されずお互いに混在しており、[……]運動構成員をはじめ、運動イデオロギーという側面においても広い範囲の運動組織を網羅してい」て、「単一的で、巨大な一つの集団というよりも、直接的な利害関係が異なる多様なネットワークとして形成されてい」たと言われています。このあと、李明博<sup>イミョンバク</sup>政権が成立していくに際してニューライトの運動の基盤が確固たるものになっていく流れがあると理解をされています。

## ニューライト運動の組織

今日お話しするところの、このニューライトと歴史学との関係を見るときに、重要なポイントになるのが2004年11月に発足した「自由主義連帯」という団体です。これは盧武鉉<sup>ノムヒョソン</sup>政権の対外政策を親北朝鮮で反米的なものだと批判し、歴史教科書の見直しの運動を展開します。また、2006年の4月には、安秉直<sup>アンビョンジク</sup>さんを発起人の一人とする「ニューライト財団」というのが設立されるわけです。さらにこのあと、この二つが2008年に統合して「社団法人時代精神」という組織になっていきます。

この「ニューライト財団」の方の設立趣旨文というのがあり、これは安秉直<sup>アンビョンジク</sup>さんが書かれたものです。下記にそれを引用します。

「[……] 政治思想の分野において、(一) 執権民主化勢力によって、その正当性が否定された1948年の建国と1960年代以後の産業化が正常かつ必須の歴史過程であったことを究明し、大韓民国の建国と経済発展が世界に誇るべきものであることを実証し、(二) 統一至上主義者たちが推進してきた太陽政策が虚構であることを明らかにし、これを対外的に闡明することで北韓〔＝北朝鮮〕の人権改善と体制変化が朝鮮半島問題の本質であることを明らかにする一方、(三) 分配を前面に押し出した大きな政府の統制・干渉政策ではなく、「小さな政府―大きな市場」に基づいた成長第一の自由主義経済政策が真の市場経済秩序を定立し、貧困問題を解決する正しい方向であることを提示した。[… …]

ニューライト思想の深化・発展は韓国近現代史に対する新しい認識から出発する。執権民主化勢力は韓国近現代史が自主的であり内在的なものでなければならぬと主張してきた。よって、彼らが追究する目標は自主・自立・自衛にあった。このような歴史観は虚構であり、韓国近現代史において実証することのできないものである。なぜならば、韓国近現代史は実際に国際関係のなかから出発し、展開してきたためである。[……]

しかし、執権民主化勢力はこのような国際関係を単純な帝国主義の侵略と民族独立運動（侵略と抵抗）としてのみ把握する。だが、侵略と抵抗は韓国近現代史の一側面にすぎないのであって、開発と協力がもう一つの異なる側面を構成する。日帝下の制度改革と開発、米軍政下の自由民主主義の導入と援助、産業化期の先進国からの制度・技術・資本の導入などがそれである。今日の自由と繁栄はこのような国際的關係下における開発と協力を排除した侵略と抵抗だけでは決して成し遂げられなかった。」

たとえば、冒頭の一段落目の（二）のところというのは、北朝鮮、共和国に対する反発というものが非常に出ていて、（三）は新自由主義の経済の話です。

二段落目のところは「ニューライト思想の深化・発展は韓国近現代史に対する新しい認識から出発する」と、「執権民主化勢力は韓国近現代史が自主的であり内在的なものでなければならぬと主張してきた」、「よって彼らが追究する目標は自主・自立・自衛にあった。このような歴史観は虚構であり、韓国近現代史において実証することのできないものである。なぜならば、韓国近現代史は実際に国際関係のなかから出発し、展開してきたためである」と言っています。

さらに次の段落で、「しかし執権民主化勢力はこのような国際関係を単純な帝国主義の侵略と民族独立運動、侵略と抵抗としてのみ把握する。だが、侵略と抵抗は韓国近現代史の一側面にすぎないのであって、開発と協力がもう一つの異なる側面を構成する」と、そして「日帝下の制度改革と開発、米軍政下の自由民主主義の導入と援助、産業化期の先進国からの制度・技術・資本の導入などがそれである」と、次に「今日の自由と繁栄はこのような国際的關係下における開発と協力を排除した侵略と抵抗だけでは決して成し遂げられなかった」と、こういうことを述べているわけです。結局は反北朝鮮、反共イデオロギーと近代主義が結合している、という構図は非常にわかりやすく見てとれるわけです。

## ニューライト運動に対する批判

こうした流れの中で、先ほども申し上げた教科書をめぐる具体的な動きというのが出てきます。たとえば、2006年に「教科書フォーラム」が創立されました。2008年には先ほどの歴史観において『代案教科書 韓国近現代史』を刊行します。そしてまた2013年には、教学社という出版社が検定教科書の『韓国史教科書』を刊行しますが、採択は伸び悩んだと言われています。その採択が伸び悩んだことの一つの理由は、植民地近代化論、特に日本の植民地支配を近代化に貢献したという文脈で捉えているような歴史観であるということと、民主化そのものに対する評価が過小評価であるということ、これらが批判の対象となったためです。

実は、このような背景で重要になってくるのは、ニューライト運動の内部からも批判が出てきているということです。特にニューライト運動そのものが逆に批判を受けるようになってきます。それは李明博<sup>イ・ミョンバク</sup>政権の発足に伴って運動の基盤を確固たるものにしたわけですが、逆にその政権への近さゆえに特定の政権の利益集団と目される動きが出てきてしまい、李明博<sup>イ・ミョンバク</sup>政権の支持率低下に伴って勢いを失っていくという流れがあります。

先ほど申し上げたような、植民地近代化論や民主化に対する過小評価については、ニューライト運動の中でも批判する人たちが結構いるものですから、「ニューライト」と一括りにはしていますが、実はニューライト運動総体の中ではそれほど基盤が安定している歴史観ではなかったということがあつたわけですね。そういった状況が2000年代にかけて出てきたということになります。

---

## むすびにかえて

### かつてのニューライト運動と『反日種族主義』との差異

そういったことを踏まえながら、この『反日種族主義』の問題、あるいはその基盤となっている植民地近代化論やいわゆるニューライト的歴史観というものがどういう性格のものとして捉えられるのか、ということを考えてみたいと思います。

いわゆる進歩派政権である文在寅政権との緊張というものが、これらの歴史観の中にはあるわけですが、それは盧武鉉政権期のニューライト運動、あるいは植民地近代化論の政治化が盛り上がっていく、そういう様相と共通しているわけです。しかし現在は、ニューライト運動自体の基盤が弱体化をしていて、しかも、歴史観としてはニューライト運動の中でも批判的なものが結構あるわけです。そういう中で、かつて盧武鉉政権期以降の盛り上がっていくような様相とは少し違っているかと思います。

たとえば、新自由主義経済や反共、反北朝鮮イデオロギーというところよりも、今やはり問題になっているのは戦時労働動員であるとか、日本軍「慰安婦」問題などが直接の題材となっているという点での差異があります。つまり、強制連行や日本軍「慰安婦」の問題を、ニューライトの人たち全部が、『反日種族主義』の人たちのように捉えているわけでは必ずしもありません。そういうことを考えたときにも若干の違いがあるのではないのでしょうか。

#### 「日韓それぞれの歴史葛藤」の「日韓間での交錯」を捉える史学史の必要性

しかしながら、今日この問題を考えるときに少し足枷になっているのではないかと思うのが、やはり「反日」か「親日」かという対立構造の中に論争のイメージが落とし込まれてしまっているということだろうと思います。それは当時ソウル大学の教授で、後に法務部の長官になった曹国という人が、『反日種族主義』を「吐き気のする本」、「反吐の出る本」と、あるいは「市民たちは彼ら、あの『反日種族主義』の執筆者たちを親日派と呼ぶ自由がある」という形でSNS上で批判をしました。私は「これもどうなのかな」という気はします。要するに、分析するという方向に議論が行かないために、逆にこのような対立構造の中に巻き込まれてしまう傾向にあるのではないかと思います。

そういう観点から見て、私は、歴史観の対立を「歴史葛藤」と捉えています。実は、「歴史認識」とか「歴史認識問題」という言葉は、私自身はあまり使わないようにしています。「わかるようで、よくわからない」というのがその理由です。

「具体的にどういう対立や葛藤があるのか」ということを見ていく必要があります。これは冒頭でも申し上げたように、日韓の対立ではなくて、たとえば康誠賢さんの本などもそうです

が、韓国における歴史葛藤そのものが十分に伝わらないままに、断片的なところで歴史観の対立が紹介され、それがさらに非常に断片的なものとして日本の保守派層に受容されている、という構図があるわけです。

けれども、日韓それぞれに抱える葛藤というものが日韓間で交錯しているという捉え方、これをどういうふうに捉えて、またそれを伝えていけばいいのかということは、どちらかと言うと我々の課題としてあるのだらうと思います。そういうことを一つの課題として考えているのですが、やはりそのためには韓国内における歴史葛藤を捉える視角として史学史が要るのだらうということです。若干手前味噌な見解になりますが、こういったものをどういうふうに進めていくことが可能か、という点について、やはりきちんと歴史学界の中でも議論をしていく必要があるのではないかと思います。

冒頭の方でも挙げましたが、『誰のための歴史なのか』という本は多面的に批判を展開しているところがあり、韓国語、朝鮮語が読める方はアクセスができるのでいいのですが、「本当は日本でも簡単に読めるようになるといいな」ということは考えています。ただ、あまりそれを強調すると「お前やれ」というふうに言われそうなので、これ以上は仕事が増やせませんが、その必要性があるだらうと思っています。

まだまだ私自身も深めていかなければいけない問題があります。たとえばニューライトと歴史学の関係性で言いますと、やはり 1990 年代から 2000 年代前半に出てきた問題と、その後、現在に至るまでの過程で出てきた問題との間に若干の変化があるようですが、そこはまだきちんと追えておりません。あくまで話題提供、試論というような形でお話をさせていただきました。

とりとめのないお話になりましたが、以上で私の方のお話を終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

---

みつい・たかし

現在、東京大学大学院総合文化研究科教授。専門は朝鮮近代史。主な著書に、『シリーズ戦争と社会 3 総力戦・帝国崩壊・占領』（岩波書店、2022 年、共著）、『植民地朝鮮の言語支配構造——朝鮮語規範化問題を中心に』（ソミョン出版 [韓国]、2013 年）、『朝鮮植民地支配と言語』（明石書店、2010 年）など。